

東京都三多摩公立博物館協議会会報

# ミュージアム多摩

## No.29

### 目次

【新規入会館紹介】	.....	1	
●国立ハンセン病資料館のリニューアル	国立ハンセン病資料館	高野弘之	
【研修会報告】	.....	3	
●「多摩の博物館小史」体験メモ	八王子市総合政策部市史編纂室長	佐藤広	
●図書館・博物館合同研修会	地域資料を活かす図書館・博物館	—地図資料を中心に— 調布市郷土博物館	金井安子
会員館活動報告	.....	6	
会員名簿	.....	19	

2008.3

東京都三多摩公立博物館協議会



## ◆新規入会館紹介 国立ハンセン病資料館

平成20年度より三多摩公立博物館協議会に新たに国立ハンセン病資料館が加盟いたします。

### 国立ハンセン病資料館のリニューアル

国立ハンセン病資料館 学芸員 高野 弘之

#### <資料館前史>

本館は国立療養所多磨全生園（東村山市）に隣接する敷地に位置しており、1993年6月に高松宮記念ハンセン病資料館としてオープンした。これは、財団法人藤楓協会と多磨全生園入所者自治会の両者の意図が合わさってはじめて実現した構想であった。

まず藤楓協会だが、40周年記念事業として総裁であった故高松宮宣仁親王殿下を追慕し、また過去100年にわたるハンセン病を取り巻く社会の変遷と諸事業の歴史を明らかにし、後世に資するための記念資料館を建設しようという構想を持っていた。

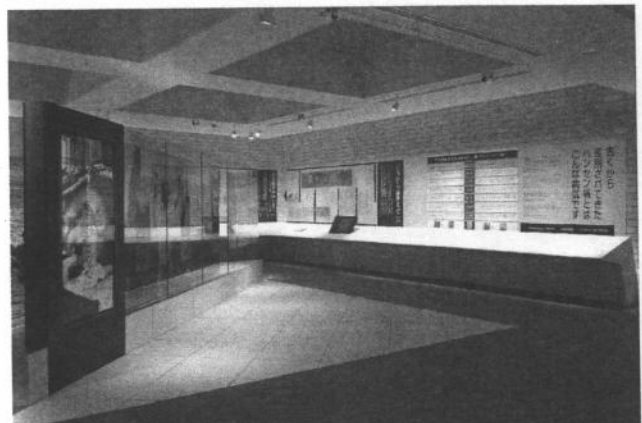
一方で入所者側は、自分たちの「生きた証」を後世に伝えるために何らかの施設を作って資料を収めたいという思いを受け継いでいた。特に多磨全生園では早くから資料の収集・保存に理解ある入所者が活動し、入所者自治会図書館がその中心的な役割を果たしてきた。ここでは図書に限らず入所者の生活用品や関係する文献資料、新聞なども収集対象とし、小さいながらも展示室を設けていた。これらを外部の研究者にも閲覧のために開放していたから、所蔵資料を利用した優れた研究を生むことができ、ハンセン病問題の普及啓発に大きな役割を果たしていた。

両者の構想を実現させるにあたって問題となるのは費用であるが、建設費についてはハンセン病関係者及びこのことに賛同された財界からのご支援を受け、入所者も駅頭などに立って募金活動を行うことで解決した。実際のコンテンツについては、関係資料の収集から展示、その後の運営まで全般にわたって全生園入所者によるボランティアによって支えられていた。開館後も常設・企画展示の作成、展示案内、語り部活動、講演会などの催し物を通じて患者・回復者のあゆみを伝える教育普及活動を行ってきた。本館に最初の学芸員が着任したのが2002年、小職が4人目の学芸員として2006年に採用されたが、それまでは入所者によるまさに手作りの活動が行われていたと言って良い。

#### <「総理大臣談話」と資料館増築>

このような経緯を受けて本館は開館以来今年で15年を経過し、すでに17万人を超えるお客様をお迎えすることができた。この15年間だけでもハンセン病をめぐる社会状況は大きく変わった。最も大きい変化は1996年の「らい予防法」廃止だが、本館に直接大きな転機をもたらしたのは2001年の「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」の原

告側勝訴、それに伴って出された小泉純一郎内閣総理大臣（当時）による「ハンセン病問題の早期かつ全面的解決に向けての内閣総理大臣談話」に「ハンセン病資料館の充実」が盛り込まれていたことである。「談話」を受けて組織された「ハンセン病資料館施設整備等検討懇談会」内で検討を重ね、増築工事のため1年半の休館期間を頂戴し、2007年3月末に厚生労働大臣、東村山市長をお迎えしたリニューアル記念式典を挙行し、現在の名称に改めてリニューアルオープンした。今回は建設費用が全額国費によって賄われ、厚生労働省から委託を受けている「社会福祉法人ふれあい福祉協会」によって運営され、運営費も国費であり、スタッフも充実を見ている。増築により展示室が2倍以上に拡張されるなど施設面の拡張が進んだことについては、昨年9月に見学会を催した中でご紹介したとおり特にバックヤード施設に大幅な改善が図られた。これらは来館者の目に触れることは全く無いが、収蔵庫1・2、特別収蔵庫の3ヶ所は24時間の管理空調を行うように改められ、トラックヤードには段差解消機や大型エレベータを設けるなどハード面の整備は目を見張るものがある。

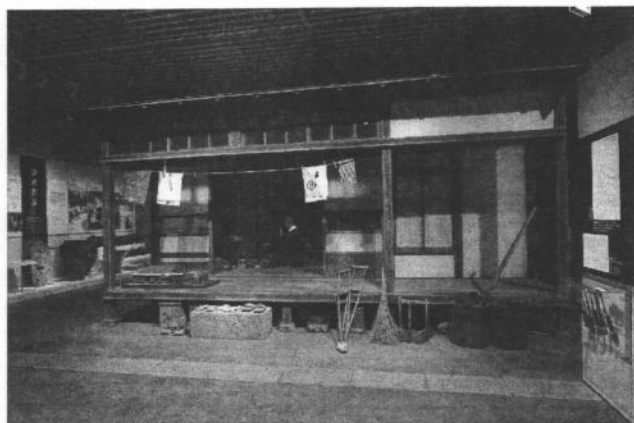


展示室1「歴史展示」の導入部分  
ハンセン病の歴史を古代から現代まで通観できるよう配慮

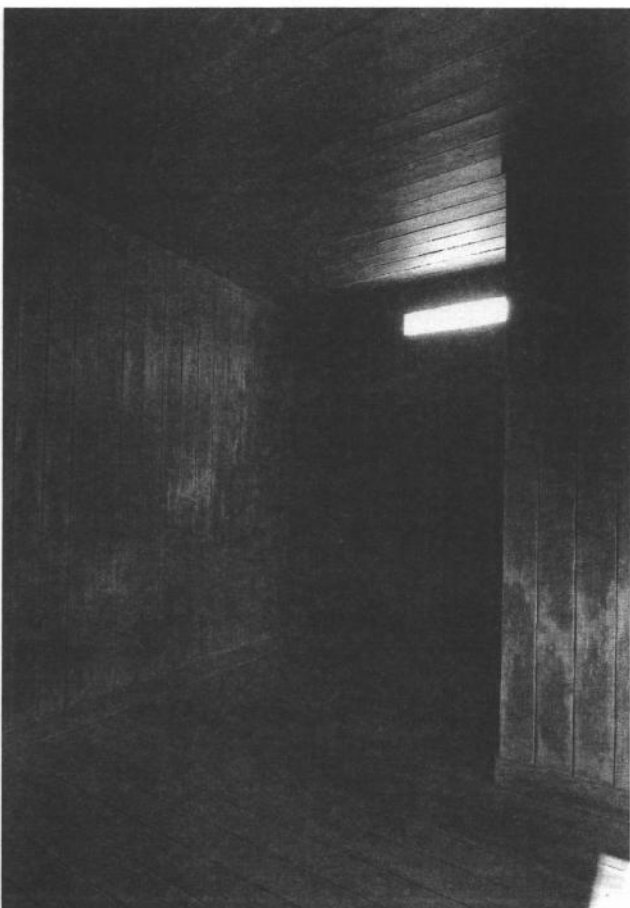
#### <2007年度の状況と今後の課題>

2007年度は21,120人のお客様をお迎えすることができたが、これは過去15年間で最も多い入館者数であった。これらは本館に対する関心の高さと、社会的期待の現れでもあると思う。より多くの人々に「ハンセン病問題」を知ってもらうための機会を提供する努力を、本館は今後も継続し続ける義務を負っている。ただ、残念ながら館内で収集したアンケートなどからは「（東村山）市内に住んでいますが、資料館のことを知りませんでした」

といったような、広報活動に工夫の余地が必要であることを思わせる意見も集まっている。本館の存在そのものがまだまだ知られていないのであれば、広報活動を充実させ、例えば団体見学の積極的な誘致などを通じて新規の来館者を開拓するなどの方法が考えられよう。また、常設展などコンテンツを充実させることはもちろん、定期的な企画展の開催（春・秋の年2回）、ハンセン病関係映画の上映会などさまざまな催事で1人でも多くの方に本館に足を運んでいただけるよう努力したいが、これらは学芸員の資質が問われる重い課題である。



「山吹舎」における雑書生活の様子  
昭和3年(1928)全盛病院に建てられた男性  
性独身者の寮舎「山吹舎」の一室を  
再現した復元展示



### ＜資料館の負うもの＞

巷にはハンセン病に関する書籍が少なからず発行されており、全国にあるハンセン病療養所（国立13・私立2ヶ所）は大小の差はあるが資料展示室などを設けているケースが多いから市民がハンセン病に関する知識と接する機会は数多くあるかもしれない。だが、現実にはハンセン病に関する差別偏見は未だに社会に根強く残っている。ハンセン病問題はさまざまな要因が複雑にからみ合って構成されているが、隔離政策により市民から「患者」が見えなくなったことで無知による偏見が助長されてしまったことが解決をより困難にさせてしまったと思われる。本館は、来館者が資料を通じて事実と向き合い、自ら主体的に考えを深める、という博物館施設が持つ機能を最大限に発揮させ、ハンセン病患者・回復者に限らず社会的弱者との共生を志向する人権尊重の精神を養う場になることを強く求められている。本館では療養所入所者による「語り部」活動が行われているが、学芸員はもちろんだが、社会の人々皆が「ハンセン病問題」の「語り部」になってこれを語り継げるようになっていきたい。

このたび国立ハンセン病資料館は三多摩公立博物館協議会に加盟した。多摩地域に立地しながらも同地域の博物館との連携が希薄であったことを克服し、合同の見学会や研修、交流を通じて学芸員のスキルアップをしたいとの判断からである。この場を借りて各位のご助力と、1人でも多い市民の来館を願いながら擲筆としたい。



【語り部活動】の様子（映像ホール）

### 「特別病室」の再現展示

群馬県にある栗生楽泉園に設けられた「特別病室」の再現展示。患者からは「重監房」と呼ばれ、「草津送り」と恐れられた。

## ◆ 「博物館小史体験メモ」

八王子市総合政策部市史編さん室長 佐藤 広

### 【はじめに】

私は八王子市郷土資料館に勤務し、多摩地域の博物館の一館員として多くのことを経験させていただいた。とりわけ三多摩公立博物館協議会加盟館のみなさまにはお世話になった。平成19年度からは市制100周年記念事業の市史編さんという新たな仕事について、博物館から離れた地点に立った。そこで、個人的ではあるが体験から多摩地域の博物館の動きにふれてみたい。

### 【文化財保護運動から郷土資料の保存へ】

自治体における歴史系の博物館として、現在の東村山ふるさと歴史館の前身である東村山市立郷土館が、昭和40年に開館した。その後、小・中学校の教諭を中心とした市民の文化財保護運動を経て、行政的には東京オリンピック記念事業として八王子市郷土資料館が昭和42年に開館し、翌年の昭和43年には登録博物館となった。この八王子市郷土資料館の設立は、世田谷区がモデルになったものと考えられる。世田谷区郷土資料館は、昭和39年に区政30周年事業として区立として最初の登録博物館として開館した。八王子からは世田谷への視察を行い、条例なども類似している。八王子市の開館前年の昭和41年には八王子市から東京都に移管された東京都高尾自然科学博物館が開館し、登録博物館となっている。

### 【本格的な博物館活動へ】

昭和48年に町田市郷土資料館（昭和51年4月改称現在の町田市立博物館）の開館は、新たな自治体博物館の時代の到来を告げた。市のレベルで専門家の館長を置き、全国を対象とした規模の大きい特別展を年に何度も企画開催する運営手法は、私たちの現場においても影響があった。今日では常識となっているが特別展の開催に際し、展示図録を刊行したのは多摩地域で町田が最初であったと思う。八王子市では、町田市を意識して、「町田で発行しているのだから八王子でも発行したい」と予算要求して展示図録刊行の努力をした。当初は、廉価で刊行できるように版下作りのため、町田市博物館の暗室をお借りしたことがある。町田では館に配置された公用車で遠方にも出かけ、深夜や明け方でも展示作業を行っていた。それはとても刺激的であった。多摩地域の学芸員の交流においても、町田市の学芸員がリーダーシップをとっていた。この昭和50年代に、学芸員の地位も確立して博物館活動のスタイルが出来上がったように思う。

### 【生涯学習を軸に】

昭和60年開館の清瀬市郷土博物館は、生涯学習の場としての博物館という新たな分野を提示してくれた。伝

承スタジオでの体験教室を前面に押し出しての館運営はとて新鮮で、展示以外の活動で来館者を獲得できることを教えていただいた。また、古代からの連綿とした歴史資料を持っていなくとも、市民にとって意義ある博物館活動の可能性を切り開いた。スペインでの航空機事故で亡くなった上司の小泉恵一館長は、戦後の社会教育の先駆的实践者であった。多摩地域の博物館の組織化に努力した。また、体験学習に強い関心を持ち、熱心に清瀬市郷土博物館の設立に関係し、小泉館長の経験が清瀬市になんらかの関与をしていると考える。

### 【計画的な博物館づくり】

大国魂神社境内の市立図書館の一角にあった府中市郷土資料館はもう人々の記憶からなくなっているかもしれない。8年の博物館建設の準備を経て、昭和62年に府中市郷土の森博物館が開館した。計画的に学芸員をはじめ職員を配置した準備は、博物館建設の手本であった。故人となられた学芸員の横尾友一氏の仕事も、自治体における博物館行政の隠れた側面を教えてくれ、その仕事は高く評価されて良い。植栽公園・古民家園・プラネタリウムを併設した規模の大きい博物館は多摩地域で初めてのこと、「森」というネーミングも新鮮であった。

### 【おわりに】

振り返ってみると、三博協の活動は博物館群として相互に影響しあい、交流を重ねた力の大きさを実感させてくれる。自治体が自らのまちのごく平凡な資料に注目して資料の収集保管・調査研究・学習活動を組織的に展開したのは、わずか30数年前からのことではあるが、研究蓄積や展示成果、資料の集積は膨大なものがある。地域の博物館におけるこの知の蓄積が地方自治、地方分権の根本を担う。だから、学芸員は狭い学問分野や博物館という施設の中にもっているのではなく、地域社会に飛び出し、博物館サイドから地域課題の解決に積極的に立ち向かっていく時代ではないだろうか。

この小文は、パルテノン多摩歴史ミュージアムでの平成19年度三多摩公立博物館協議会第2回研修会（平成19年12月12日）で、「多摩川流域の博物館と民具」と題して報告した内容の一部を改めて書き記したものである。

# ◆図書館・博物館合同研修会 地域資料を活かす図書館・博物館 —地図資料を中心に—

調布市郷土博物館 金井安子

## 【合同研修会の開催】

三多摩公立博物館協議会では、平成19年度3回目の研修会を平成20年2月1日に府中市郷土の森博物館で、「地域資料を活かす図書館・博物館」をテーマとして、多摩地域の図書館協議会組織（三多摩地域資料研究会）と合同で開催しました。この合同研修会は、図書館からの提案を受け、3回（6月21日、11月8日、2月19日）の準備会を経て、開催に至りました。研修会の前には、各館に地図資料に関する事前アンケート（どのような地図を所蔵しているか、地図の取扱い・整理方法で困っていること、研修会に期待することなど）をお願いして、集約した回答を当日資料として参加者に配りました。

## 【合同研修会の趣旨と報告された事例】

地域に関わる資料を収集・保存し、閲覧やレファレンスに供し、展示や調査研究をしていくことは博物館の基本的な事業ですが、地域の図書館がその大きな一翼を担っていることは言うまでもありません。博物館も図書館も、市民サービスの一環として資料の保存や活用に対して共通する課題を持っています。今回の合同研修会では、地域資料のなかでも、近世の「村絵図」から現代の「住宅地図」に至るまで、さまざまな地図資料が各館に保存され、活用されている場合が多いことから、「地図」資料をテーマに選びました。

会場となった府中市郷土の森博物館では、特別展「発掘！府中の遺跡」と「梅まつり」を開催中で、午前中が特別展と府中ゆかりの詩人村野四郎の記念館の見学会、午後からは大会議室で3本の事例報告と1本の講演というプログラムで進行しました。

以下、報告された事例と基調講演の概要をレポートします。

### ①報告「国土地理院発行地形図の活用」

金井安子（調布市郷土博物館）

地域に関わる資料として地図を収集、保管するだけでなく、その地図からどのような地域情報を引き出すことができるかを課題として、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図に表示されている建物や土地利用を独自に調べて、地域の歴史を地図から読み取る試みを紹介しました。

例えば、大正10年（1921）に調布町上石原の多摩川堤防内に建設され、水泳の全国大会に使用された東京府の公衆水泳場（100メートルプール）は、後の年代の地図にはっきりその痕跡が残っています。ただし、そこにプールがあったという認識なしで地図を見ても、その痕跡が何であるかはわかりません。下布田6号墳（狐塚）は、昭和20年代に墳丘が削られ、古墳の痕跡をわずかにとどめるだけでしたが、明治39年から昭和14年まで各年代の地形図に古墳らしき表記があり、発掘調査の結果、その



位置・規模ともに地形図の表記とほぼ合致することがわかりました。

所蔵する地図を閲覧提供する時には、地図から読み取れる地域情報を蓄積し、情報とともに地図を提供することが地域の図書館、博物館の果たすべき役割であり、「地域資料を活かす」ことになると思います。

### ②報告「歴史資料としての地図とその活用—情報提供の立場から—」 馬場治子氏（府中市郷土の森博物館）

府中市では、近代になってから刊行された地図は主に図書館が、それ以前の地図は主に博物館が収集しています。近世の村絵図は、所蔵する家ごとに古文書と同様の方法で整理し、閲覧提供しています。古文書の場合、マイクロフィルムで撮影を行い、印画紙に焼き付けたものを製本して閲覧提供してきました。この方法だと、地図のような大型の資料は全体を撮影するのが難しく、それを解決するためには、地図を広げた上にやぐらを高く組むしか方法がありませんでしたが、最近ある業者が、カメラを移動させながらリモコンでシャッターを切るという方法を開発しました。郷土の森博物館では今年度その方法を試みています。



地図資料も、利用する時にきちんとした資料批判が必要な場合があります。府中市の市制施行を記念して昭和29年に刊行された「府中市観光案内図」を例にとると、校正刷りと思われるものと完成品の2種があります。後者には昭和29年には未完成の国道20号線が入っているので、そのまま使うには注意が必要です。また、この地図の裏面には会社の広告が入っていて、その中には、進駐軍の自動車を修理していた「ビクターオート株式会社」の社名があります。ある時、この時代の地図が何かないかという問合せがあり、事情をうかがったところ、なんと「消えた年金」を証明するために、現在はなくなってしまったかつての勤め先を探しているとのことでした。地図資料の閲覧提供にも、このように利用者のさまざまなニーズがあると痛感しました。

### ③講演「地図資料の読み方・扱い方」

野々村邦夫氏（財団法人日本地図センター理事長）

日々の暮らしの中で、何気なく見ている地図をパワーポイントによるスライドショーで次々に見せていただきました。地図というと「住宅地図」や国土地理院発行の地勢図・地形図、〇〇市全図などを思い浮かべがちですが、講演をうかがって、実は毎日のようにさまざまな地図に接していることに改めて気付かされました。また、地図を作る時には、利用者の視点からいかに見やすい地図を作るかを考えることが大切だとよくわかりました。

ちなみに、この視点から合格点をつけられる一例として、結婚式の案内状などに添えられてくるホテルの案内図が示されました。ある地下鉄の出口にある付近案内図と自転車放置禁止区域図は、隣接して立っているにもかかわらず、一方は地図の常識どおり北が上、一方は見やすさを優先した結果、南が上になっていて、地図を見る人に混乱が生じるのではという事例もありました。

野々村氏の巧みな話術と豊富な事例の紹介により、一気に地図が身近に感じられ、図書館・博物館の職員だけで聴くには惜しいような気がしました。

### ④報告「地図資料目録のホームページ公開」

津野富子氏（東京都立多摩図書館）

都立多摩図書館では、所蔵する地図資料の中から利用者が探している地図をいかに早く出すことができるかを検討していましたが、職員の手づくりによる目録をホームページで公開し、画面で確認しながら地図を探せるようにしました。その中でも、国土地理院発行の5万分の1と2万5千分の1の地形図および東京都市計画協議会と武陽堂発行の2千5百分の1の東京都地形図は、東京都全域の地図上から検索することができるよう工夫されています。ホームページの「多摩資料地図目録」をぜひご覧ください。

<http://www.library.metro.tokyo.jp/14/index.html>





## めざせ！縄文人

東村山ふるさと歴史館 千葉敏朗

平成19年度、東村山ふるさと歴史館では、市民ボランティア「はっけんのもりを育てる会」と協力して、「めざせ！縄文人—縄文体験塾」という事業を行った。これは、低湿地遺跡として著名となった下宅部遺跡現地で縄文体験を行うことで、子どもたちが自分たちの住む地域の歴史や文化に対する学習のきっかけづくりをすること、当時の生活技術を実体験することを目的としている。

1回目は遺跡公園「下宅部遺跡はっけんのもり」の開園3周年イベントで、2回目は東京都文化財ウィークの一環事業で行なった。いずれもイベントに訪れた不特定多数の子どもたちを対象とした、屋外での事業である。

体験できるのは、縄文食・土版作り・火起こし・弓矢・アングイン編み・縄文楽器（土笛・土器太鼓）演奏・等々で一般的な内容であるが、下宅部遺跡から出土した豊富な資料に引き付けて意味づけをしている。例えば、弓とシカ・イノシシの骨が大量に発見されていることが、弓矢体験をする動機となる。また、実際に音が鳴る土笛が出土していることも縄文楽器演奏につながっている。

しかし、自由参加形式の体験事業は、遊びの要素が強くなり、その場限りの楽しみで終わってしまう傾向がある。そこで歴史館の体験学習室を使い、事前申込み制、午前10時から午後3時までというやや長い拘束時間を

設定して3回目を行った。

午前は、まず張りぼてのシカとイノシシを的にして弓矢体験（狩）をし、狩が成功したという設定で、縄文スープと鹿肉・猪肉のステーキの縄文食を作り、昼食とした。午後は下宅部遺跡の川底から採取した粘土を使っての縄文土器作りだが、午前の縄文スープを作る時に複製土器でお湯を沸かし、鍋としての土器を意識させておくなど、複数の体験に関連性をもたせるようにしてみた。

事業後の子どもたちの感想文を読むと、各々興味を持つポイントが異なっていた。複数の体験を絡めることが子どもたちの多様な感性を刺激することになり、それぞれの「きっかけづくり」になったようである。



## 特別展「八王子の天然理心流」

八王子市郷土資料館 小林央

八王子市郷土資料館では、平成20年2月26日（火）から3月30日（日）までの期間、特別展「八王子の天然理心流」を開催しました。天然理心流は、江戸時代後期、寛政年間（1789～1801）に近藤内蔵之助によって創始された武術で、剣術・柔術・棍法（棒術）と気術を備えた総合武術といわれています。のちに活躍した新選組の隊士たちが身に付けていた剣術として有名です。

八王子では、流派が創始されたごく早い時期に当時の戸吹村（現・八王子市戸吹町）に伝えられ、同村の名名家の出である坂本三助（近藤三助）が二代目を継ぎ、以後、八王子や多摩の村々へと広まっていきました。気術は二代近藤三助の急逝によって途絶えてしまいますが、その後の師範たちの多くが剣術のみを指南したのに対し、八王子では、剣・柔・棍の三術が受け継がれました。

本展では、八王子に伝えられた流派草創期の史料や、剣術のほか柔術・棍法にも焦点を当て、  
展示風景



八王子ならではの資料を展示・公開しました。また、事前調査では、市の広報紙や町会の回覧板を通じて寄せられた、市民からの情報や、当館で古文書調査を行っているボランティアの方々の情報もたいへん役立ちました。

こうした調査・研究の成果として、展示図録『八王子の天然理心流』を発行し、内容も展示物の解説だけではなく、資料集としても活用していただけるものとなっています。免状などの長物の史料も見開きで全体が見られるよう横版・オールカラーの体裁とし、流派の神髓を著した「印可」などの重要書は、写真とともに翻刻文もあわせて掲載しています。これまで天然理心流関係の史料は、図版として史料全体が紹介されることは、ほとんどなかったのですが、今回、史料所蔵者の皆様のご協力により、収録することができました。八王子の近世史研究、新選組・天然理心流の研究に少しでも役立てていただければ幸いです。



図録『八王子の天然理心流』



## 郷土の森博物館プラネタリウム激動の1年

府中市郷土の森博物館 本間隆幸

### 名古屋にて

2006年12月、名古屋市科学館のプラネタリウムで、大きなプロジェクターが設置されていました。そこから映し出された、星空、映像は息を飲むほど美しく、天空を彩っていました。これが、KAGAYA銀鉄（KAGAYAスタジオ制作の宮澤賢治「銀河鉄道の夜」）、全天デジタル映像、デジタルプラネタリウムとの初めての出会いでした。プラネタリウムドームに、様々な映像を映し出してきましたが、この映像はどれも違ったものでした。これをぜひ、いろんな人に観てもらいたいと思いましたが、話に聞くとこの映像システムは、そう簡単に導入できる金額ではありません。

しかし、いろいろ業者に相談したところ、某社から1万ルーメンもの明るさのフルハイビジョン（1920×1080）が出るらしいということで、早速デモをやっていただきました。それは、まさに名古屋で見た物と同じでした。それから、少ない予算をかき集めて、リースを始めることができ6月からいよいよ「銀河鉄道の夜」の投影が始まりました。プラネタリウムの全天に広がる美しい映像は、お客さまの心を捕まえ、余韻を楽しんでいるのか、投影が終わっても席を立とうとしない方が多々見受けられました。さらに、お客さまの中には今までにない雰囲気の方が新たな客層として加わったようでした。こうして、プラネタリウムの番

組は大きく変化をとげました。

### 全天デジタルプラネタリウム

このところ各地でプラネタリウムのリニューアルが行われています。この多摩地域では、サイエンスドーム八王子が最新の全天デジタルプラネタリウムシステムを導入し2008年3月にリニューアルオープンをしました。この郷土の森博物館でも、3か月限定ですがリニューアルが一部実現することになり、日本初となる全天デジタル映像フェスティバルとして、日本初公開となる「シークレット オブ ザ サン」、「スター オブ ファラオ」や先述の「銀河鉄道の夜」も含めて9本もの作品を投影することとなりました。

### 地域連携

地域のプラネタリウムで地域連携として、スタンプラリーをやるということになりました。内容は、JAXA宇宙研究開発機構宇宙科学研究本部から、現在活躍中の科学衛星の模型とスタンプを借りて、各施設に置くこととし、サイエンスドーム八王子と東大和市郷土博物館、さらには国立天文台の4施設で行うこととなりました。まだまだ始まったばかりで、PRもろくにできていない状況ですが、これを機会に地域の連携を強めていきたいと思えます。

## 07年度の企画展

町田市立博物館 畠山豊

07年度は5回の企画展を開催しましたが、そのうち2回の展覧会で幾つかの新たな試みをしてみましたのでご紹介します。

一つは『インドネシア更紗のすべて—伝統と融合の芸術』で、会期は第1部「インドネシア更紗の基層：王宮と村」が7月31日から8月26日まで、第2部「融合と現代：北部海岸のバティックと現代」が9月4日から10月21日まで。本展ではボランティアによる解説等の実施と、玉川大学芸術学部との共催でファッションショーを開催しました。前者については、展覧会開催に先立ち6回の講座を実施し45名の参加を得、その参加者の中から解説等のボランティアを募集し25名の参加を得ました。ボランティアによる展示解説は会期中に計17回行ない、各回10～20人の参加を得ました。また、開催期間中各週末の金曜から日曜の終日に「バティックを着よう」と題してその着付け教室を開催し、これは全面的にボランティアの皆様にお願ひしました。ファッションショーは、玉川大学芸術学部学生が企画から実施まですべてを行ない、大学で2日間3回、当館で1日2回を実施し大方の好評を得ました。また上記の他に、民族楽器アンクルンの演奏会、ジャワ舞踏、影絵芝居等を行ないました。なお、本展は当館の自主企画で、関西など全国5館を巡回します。

二つは、10月30日から12月16日まで開催した『大倉集古館所蔵 能面・能装束』展で、本展では文化庁による平成19年度芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）に参加し、「小中学生のためのワークショップ 能を楽しもう」を行ないました。ワークショップは4種類あり、①「装束をつけてみよう!」、②「謡を謳ってみよう!」、③「能面をつけてみよう!」、④「能の音楽を体験してみよう!」からなります。また、本事業には大人向けの企画とし、講演会「能と風土—町田を舞台とした謡曲『横山』—」、オリエンテーリング「謡曲『横山』の舞台—小野路を散策しよう—」の2回を行ないました。

以上、07年度中に行なった幾つかの試みを簡略に紹介しましたが、当館は来たる4月1日より教育委員会から市長部局へ移り新たな道を歩みます。

## 「昭和ブーム」の中での「昭和展」 懐かしき、あの日、あの時「～団塊の世代の昭和～」

調布市郷土博物館 長瀬衛

平成19年度は多くの博物館や美術館で昭和をテーマにした展覧会や企画展が開催された年でもあります。しかし、その内容は「昭和ブーム」を反映するかのように、戦後の復興期をテーマとしたものが多く、こうした傾向を「戦前・戦中」なき昭和展とも評されました。

本館でも「昭和の日」の制定を冠したものの、昭和30年代を取り上げた「懐かしき、あの日、あの時～団塊の世代の昭和～」展を開催しました。ここでは少し目先を変え団塊世代と呼ばれる人たちが子ども時代を過ごした、暮らしや遊びをテーマとしました。展示構成は、館内のホールにマツダ・キャロル360（写真1）を時代背景として展示し、展示室の一角には、当時の6畳間（写真2）を再現し、白黒テレビ、足踏みミシン、ちゃぶ台、タンスなど、当時の生活感を伝えました。また、メンコ、野球道具、オモチャ、切手、景品等を展示して、団塊の世代には大いに評判を博しました。

（写真1）



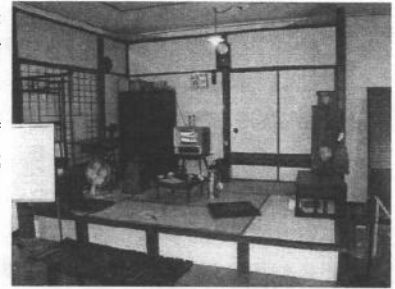
こうした展示品の多くは、企画段階で、市報によって資料の提供を呼びかけ集められたもので、展示品235点のうち115点は、市民からの提供もしくは寄贈された内容でした。

今回、昭和30年代をテーマにした理由にはいくつかありましたが、第一に、博物館の展示活動を市民とどのように協働していくのか、そして、市民とともに個人が所有する資料を展示することで、博物館事業への理解と参加を促すもっとも効果的なテーマの一つであったからです。

第二として、戦後の暮らしが歴史になりつつある反面、博物館で歴史資料として収蔵している資料が少ないこともあり、また、散逸する資料を早急に収集する目的も少なからずありました。

いずれにしても、展示期間中に多くの来館者があり、「昭和ブーム」とともに、この時代への関心の高さを感じた展示会でありました。

（写真2）



## 「多摩・島しょ子ども体験塾 機織り体験」教室を終えて

瑞穂町郷土資料館 高田賢治

かつて瑞穂町では、村山大島紬の生産がさかんでした。そうした歴史的な経緯から、瑞穂町郷土資料館では平成18年度企画展で「郷土の名産 村山大島紬のできるまで」を開催いたしました。企画展では精緻な板締め染色に関する資料のほか、製作に関する様々な資料を展示し、製作技術の高度さとその多様な行程が理解できるよう努めました。そしてそれを受け、平成19年度は8月の夏休み期間中瑞穂町内の小・中・高校生を対象に、村山大島紬を題材とした体験学習教室「多摩・島しょ子ども体験塾「機織り体験」」を開催いたしました。

体験では織物製作の楽しさと村山大島紬製作技術の高度さを体験することに主眼を置き、「機を使用したコースター作り」「Tシャツの絞り染め」「伝統的な機を使用した村山大島紬の製作」を行いました。そして、子どもたちの体験後の伝統工芸への関心と理解度を探るため、作業終了後にアンケート調査を行いました。

集計の結果以下のことが明らかになりました。まず成果として、子どもたちは織物や染色技術に対するおもしろさを感じ取り、指導者達も指導に工夫をこらし、子どもに織物技術の理解を得ることに成功した点が挙げられます。また、子どもたちの4人中1人は将来伝統的な織物の仕事をしてみたいとの回答も得られました。



しかし、問題点も浮かび上がりました。それは、子どもたちは現在の生活環境から村山大島紬に関する情報を得る機会はほとんどなく、認知度は極めて低かったことです。その理由として以下のことが挙げられます。かつて村山大島紬の生産は、農家の女性が現金収入の手段として業者から依頼され、機を織ることで担われていました。そのため昔はこの農家からも機を織る音が聞こえてきたといえます。しかし、戦後の急激な産業・生活文化の変化による生産量の減少、それに伴う製造業者の廃業の増加、後継者不足といった問題から、機が織られなくなり、身近な所から機織りが消えていったのです。

また、村山大島紬を町内の無形文化財としてみたとき、その存続の危機も迎えています。今回ご指導いただいた村山織物協同組合瑞穂支部は、現在は支部員が大幅に減少しています。また支部員の高齢化も進み後継者は不足しています。このままこの状況が続き現在の支部員が失われるとそれはすなわち、瑞穂町内で村山大島紬に関わる織物体験を指導できる人材が、完全に失われてしまうことを意味するのです。

町内の無形文化財として村山大島紬の保存を考えた場合現状では大変厳しい状況です。しかし無形文化財は、記録ではなく人から人へ伝承されて初めて生きた形で保存されるもの、と考えます。今後は、村山織物協同組合瑞穂支部とともに村山大島紬について若い世代に対しその周知を強化すること、織物に対し好印象を持った子供達を後継者育成まで繋がる方法をさぐり、実行していく必要性を強く感じました。

## 活動報告

### 奥多摩水と緑のふれあい館

奥多摩 水と緑のふれあい館は、東京近代水道100周年及び小河内貯水池竣工40周年の記念事業として、東京都水道局と奥多摩町の共同で旧奥多摩郷土資料館跡地に建設し、平成10年11月27日に開館しました。奥多摩の豊かな自然・水の大切さ・水源林の機能・貯水池（ダム）の仕組みや役割・水源から家庭の蛇口に至る過程をわかりやすく各ゾーンとも映像で紹介しています。

また、水源地である旧小河内村を主として奥多摩町の歴史・文化・郷土芸能等の紹介展示を行ない、湖底に沈んだ村の様子などもご覧いただきたいと思います。ふれあい館のある奥多摩湖は周囲を豊かな自然に囲まれ、四季折々の変化が目の当たりに楽しめる場所でもありことから、自然の博物館も併せ持った施設として奥多摩湖を訪れる多くの方々に楽しんでいただきたいと思います。

20年度の主なイベントとしては以下を予定しています。

- 春・秋のミニコンサート  
内容：マリンバの演奏とソプラノ歌手の競演  
都民交響楽団の演奏
- ヘブンアーティスト公演  
内容：パントマイム等
- 水源地郷土芸能公演  
内容：小河内の郷土芸能（獅子舞、鹿島踊り）



※ 写真は春のミニコンサート

## 戦争資料展と米軍家族用住宅

福生市郷土資料室 菱山栄三郎

福生市郷土資料室では、毎年夏に「戦争資料展」を開催しています。福生に遺された資料から、近代戦争と福生の関わりを、展示を通じて紹介しています。本年度はテーマのひとつに米軍家族用住宅（米軍ハウス）を取り上げました。

福生の国道一六号線周辺では、白壁の平屋建てモルタル瓦の住宅を数多く見かけます。これらは通称米軍ハウスと呼ばれる賃貸住宅です。昭和25年(1950)に始まった朝鮮戦争の後、米軍が長期駐留するため多くの住宅を必要とするようになりました。そのため土地を持つ地主たちが農地を宅地化し、ハウスを建設、賃貸経営を始めたのです。その戸数は昭和32年(1957)に約1100戸のハウスがあり、借家組合も結成されました。一時は約2000戸のハウスがあったといわれています。ハウスには広いフローリングのリビングやキッチンがあり、温水シャワーや水洗トイレが完備されアメリカの生活スタイルにあわせた設備がありました。

ハウスの建設は、自治体に固定資産税の増収をもたらしましたが、同時に深刻な環境問題も発生しました。米軍家族用住宅ということもあってハウスには水洗トイレが完備されていましたが、この排水により地下水の汚染が発生したのです。この時代はまだ上下水道が完備されていませんでした。この後福生では環境整備が進んでいくこととなり

ます。

米軍ハウスが立ち並ぶ光景には、独特の雰囲気があります。基地の町として戦後を歩んできた福生ならではの風景といえるでしょう。しかしながら基地内に高層住宅が増え米軍家族用住宅としてのハウスの役目は終わりました。近年は日本人の家族やハウスの雰囲気にあこがれる若者たちが数多く住んでいます。

戦後の福生の発展を支えてきたハウスは、近代福生の歴史を語る上で貴重です。しかし、築50年以上が経っているため老朽化が激しく、残念ながら近年は取り壊されるものも増えてきています。戦後の歴史を作り、また歴史を見つめてきたハウスは、平成15年度の分布調査によると現在約290戸が遺されています。



## 「東京陸軍少年飛行兵学校跡地」の指定

武蔵村山市立歴史民俗資料館 高橋健樹

平成19年7月10日、武蔵村山市教育委員会は東京陸軍少年飛行兵学校跡地を、旧跡として市の文化財に指定しました。指定ヶ所は、かつて少年飛行兵学校の正門があった付近の「東航正門跡」碑と「揺籃之地」碑の建つ二ヶ所の石碑建立地で、平成20年度には文化財説明板の設置を予定しています。

武蔵村山市立歴史民俗資料館においても、特別展「武蔵村山の戦争遺跡」（10月25日～12月7日）、文化財見学会「村山の戦争遺跡を巡る」（10月25日）、歴史講座「(仮題)多摩の戦争遺跡 - 村山を中心として -」（11月15日）などを計画しています。

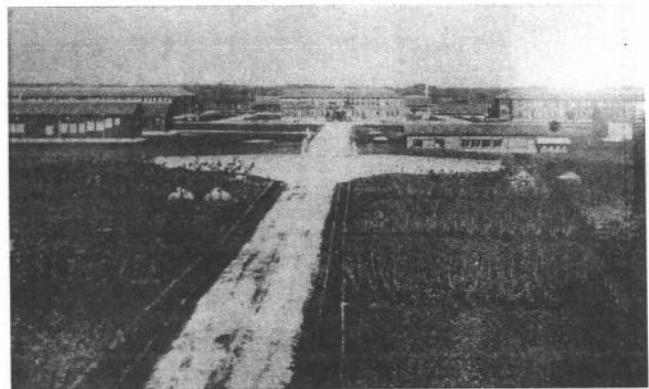
東京陸軍少年飛行兵学校は、昭和8年の少年兵制度を受けて、昭和12年に熊谷陸軍飛行学校内に東京陸軍航空学校が開校され、村山村中藤に新校舎が完成した昭和13年移転してきました。その後、昭和18年3月、太平洋戦争が激化する中、陸軍航空機部隊の戦力充実をはかる目的で陸軍少年飛行兵学校令が公布され、東京陸軍少年飛行兵学校と改められました。そして、太平洋戦争終戦後の昭和20年11月26日、陸軍少年飛行兵学校令の廃止を受けて廃校となりました。

建物は、廃校後すぐに村山中学校の校舎などに転用され敷地も戦後の食糧難に備えて農家などに払い下げられたた

め、現存するものは通用門柱と一部の建物基礎くらいです。

この他にも、市内には所沢陸軍航空整備学校（高射砲部隊東部七八部隊駐屯地でもあった）や村山陸軍病院などの陸軍関係の軍事施設が存在していて、武蔵村山のこれらの施設も立川市から福生市にかけて広がっていた広大な陸軍施設の一翼を担っていました。

また、歴史民俗資料館には、明治10年から続いた「渡辺酒造」の酒造関係民具類を中心とした資料1600点ほどが寄贈されていて、これらの資料をもとに平成20年度に展示や講座を計画しています。



東京陸軍少年飛行兵学校全景

## のらぼう菜は春の味

あきる野市五日市郷土館 藤村美映

春の味覚というと「たけのこ」や「ふきのとう」などがありますが、当市では、なんとといっても「のらぼう菜」（以下のらぼう）です。アブラナ科の一種で、菜の花と小松菜を足して2で割った様な外見をしています。花茎をゆでて食べるのが一般的ですが、クセもなく、茎はほんのりと甘く、地元では大変人気があります。

当館では、こののらぼうを旧市倉家住宅の庭先で栽培しおひたしにして、来館者に試食をしてもらっています。

10月末、近所の農家の方より苗をわけていただき、植え付けをし、3月末頃より収穫できるようになります。収穫期になると出勤後の朝一番の仕事はのらぼうの摘み取りです。土いじりの好きな職員が進んでこの仕事を引受けます。摘み取る際にはコツが少々。食べごろに伸びた花茎をその根元から、次に伸びる新芽を残しつつ摘みます。そして、茎の甘味を引き出すために、やわらかくゆでましょう。茎を指でつまんで、つぶれる位が目安です。ゆで上がったら冷水にとり、



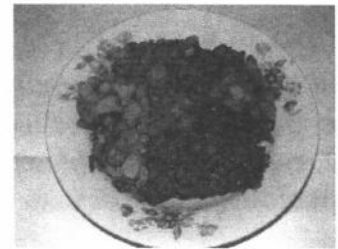
旧市倉家住宅前の  
「のらぼう菜」の畑

向きをそろえてまな板の上に並べます。のらぼうの味や歯ごたえを十分に味わうには、3～4cmの長さに切るのがベストです。水分はしぼりすぎたはいけません。うま味が流れ出てしまいます。そして皿には切り口を上に向けて縦に盛り付けましょう。こうすると茎の瑞々しい切り口が皿の上に並んで、食欲をそそります。

摘みとりから、ゆでて皿に盛りつけるまで、のらぼうの量によっては2時間位かかることもあります。しかしながら当館にとっては、この作業も春の大切な仕事であり、楽しみでもあるのです。

のらぼうは市内農協の直売所や商店等で手に入りますが朝摘みとってすぐにゆで上げた、我が郷土館で食べるのらぼうが一番おいしいと私は思っています。

3月末～4月末の期間限定、しかも必ず用意してあるとは限りませんが、一人でも多くの方に、あきる野の春の味を楽しんでいただけたらと思っています。



「のらぼう菜」のおひたし

## 「はむら自然ガイドブック」が堂々完成!!

羽村市郷土博物館 宮沢賢臣

羽村市教育委員会では、これまでに『はむらの植物ガイド』『はむらの野鳥ガイド』『はむら水の生き物ガイド』という3種類のガイドブックを発行し、郷土博物館や市役所、多摩郷土誌フェアなどで頒布してきました。しかし、発行から年月が経ち、最新の情報に基づく使い易いガイドの発行が望まれていました。

そこで、平成17年度から3カ年をかけて、市内の動植物所在調査を実施し、その結果をまとめた新たなガイドブックの作成に取組みました。調査は、「草花・樹木」「野鳥」「昆虫」「水生生物」に分けて、それぞれ市民ボランティア（市民調査員）の方々をお願いをしました。

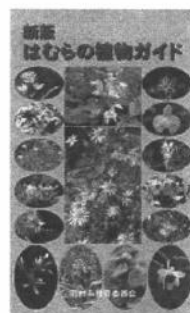
【草花・樹木班の活動】24名の市民調査員が、3グループに分かれて、担当地域の植物について季節ごとに記録しました。ガイドブックに使用する写真もすべて市民調査員が撮影しました。宅地開発のために、1年前に観察した場所に住宅が建っていたり、横田基地の中までは入れなかったりと、苦労も多かったようです。

【野鳥班の活動】7名の市民調査員が、13の探鳥ルートを中心にスコープなどで観察して記録しました。空を飛んでいる鳥の写真を撮影するのは大変難儀だったといいます。最初は「地鳴き」と「囀り」の区別ができなかった初心者も、最後は多くの鳥の識別ができるようになりました。

【昆虫班の活動】8名の市民調査員が丹念に調査と記録活動を行いました。市民調査員の活動の制約上、夜間の調査は十分ではありませんでしたが、それでも市内で最初のまとまった調査結果を得ることができました。なかでも、チョウ類では大変貴重で珍しい種も確認されました。

【水生生物班の活動】調査開始当初は、魚類や水生昆虫の調査を予定していましたが、市民調査員による調査の限界から、途中で断念せざるを得ませんでした。今後は、時機を見て専門家による調査を計画していかなければなりません。

これらの活動の結果は、それぞれ『新版はむらの植物ガイド』『新版はむらの野鳥ガイド』『はむらの昆虫ガイド』として刊行し、郷土博物館などで頒布しています。





## 清瀬市指定有形民俗文化財「清瀬市及び周辺地域のうちおり衣料」に201点追加指定

清瀬市郷土博物館 柳澤剛

平成19年12月に清瀬市指定有形民俗文化財「清瀬市及び周辺地域のうちおり衣料」が201点追加指定されました。これらは、平成18年1月に附の併用衣料10点を含め166点が指定された後に追加収集されたものが殆どです。

資料の製作年代は明治後期から昭和戦前期が中心で、布地質は絹布と綿布で、絹布には紬・平絹・縮緬・壁縮緬・斜子、綿布には縞・緋・紺無地があります。資料は一軒の家から複数収集されていることなどから、家ごとの好みやセンスを窺い知ることができるのをはじめ、所有者からの聞き取りにより、時代性や地域性、生業とのかかわりを衣類から読み取ることができるなど、様々な研究資料となりうるものです。

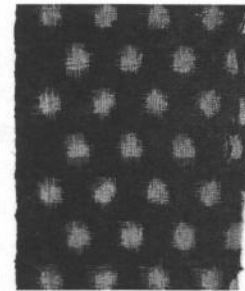
また、木綿は最後には雑巾などとして使い、燃やして灰にし畑にまいて使い切るといった時代において、多くのうちおりの端裂などが収集されたのは、極めて珍しいことです。

これら収集資料に関しては、既に指定されている「清瀬市及び周辺地域のうちおり衣料」に更なる広がり及厚みを持たせる上で、大変貴重であるといえます。それが評価されて今回の追加指定に至りました。その内訳は、着物16点、羽織15点、その他衣類（半纏・帯）14点、裂（反物を含む）

120点、附として併用衣料6点、同衣料製作用具30点です。これにより、「清瀬市及び周辺地域のうちおり衣料」は合計367点になりました。

### < 用語解説 >

うちおり：自分の家で使用するための機織りを意味し、同時に織られた布地を指します。清瀬では昭和20年代くらいまでうちおりが織られていました。



緋の端裂



端裂の束

## 収蔵庫をめぐるお話

立川市歴史民俗資料館 小川始

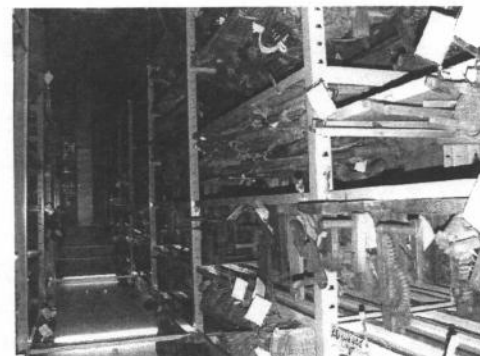
本当は自慢できるようなお話を書きたかったのですが、私の担当分野ではこれといって思い当たらないので、今回は苦労話を書かせていただきます。

テーマは「収蔵庫」。博物館に勤めている者にはおなじみの施設ですが、一般見学者の方にとっては普段見ることができない裏側の世界です。収蔵庫とは、読んで字のごとく、ものを収蔵、つまりは、しまっておくための部屋なのです。

博物館学の授業で真っ先に習うことのひとつに博物館の4つの機能があります。すなわち、「資料収集」「整理・保管」「調査・研究」「教育・普及」の4つで、それぞれが有機的に機能することが大切といわれています。このうち、収蔵庫は「整理・保管」機能を担う施設で、収集した資料を分類整理して、展示や調査など活用される機会がくるまで保管しておく大切な場所です。ですから、資料が劣化するような環境では困るわけで、それなりのつくりになっています。また、目的の資料がすぐに探し出せるように整然と収納されていなければなりません。当館でも3ヶ所の収蔵庫をもっており、資料の種類ごとに使い分けています。

以上のように、資料の保管に欠くことができない収蔵庫なのですが、当館の収蔵庫の容量はすでに限界に達してい

ます。根本的な解決策は、収蔵庫を増やせばよいのですがそう簡単にはできません。それでは、いらぬものを捨ててスペースを確保すればよいかというと、一度は資料とするために収集したものですから、通常はあり得ません。結局、資料の収集方針に沿って、余計なものを受け入れないようにするしかないのですが、「資料収集」という機能を負っている以上、資料を全く受け入れないというわけにもいきません。かくして、保存環境にシビアでない資料が収蔵庫からあふれる結果になってしまうのです。そして「大型の農機具を寄贈したいんだけど」というような電話が掛かってくるたびに、担当者は頭を悩ませるのでした。



写真：当館の収蔵庫。整然と？収納されている。



## 檜原村郷土資料館の活動について

檜原村郷土資料館 吉沢文夫

檜原村郷土資料館は圏央道の開通により「あきる野インター」より車で約40分と都心から近く、ドライブがてらに来館する観光客がほとんどですが、最近の傾向として埼玉県からのお客さんが多くなりました。

当館では「自然と観光」「歴史と民俗」の二つをテーマに景観や動植物、遺跡発掘時の出土品及び民具や兜式入母屋造りと呼ばれる古民家の模型などが常設されています。

又、村の祭りを紹介するレーザーディスクや自然と歴史を紹介するDVD放映が常時可能となっております。常設

展では「村の自然」「村の歴史と民族」を展示しております。又、特別展と致しましては、小中学校の夏休み期間中「夏休み昆虫展」「おしばな展」を開催する予定となっております。

村に生息している昆虫の標本と草木の標本を展示し、檜原村のすばらしさを知っていただきたい。

又、子供たちの夏休みの学習として、とても参考になりますので来館をお待ちしております。

※6月16日より6月21日は薫蒸消毒のため臨時休館いたします。



## 特別展「程久保小僧・勝五郎生まれ変わり物語」の開催 —市民参加の調査と展示—

日野市郷土資料館 北村澄江

日野市郷土資料館では、今秋特別展『程久保小僧・勝五郎生まれ変わり物語』を開催する。(会期9月27日(土)～12月14日(日))会場 日野市立新選組のふるさと歴史館)これは、江戸時代後期の文政5年(1822)に、中野村(八王子市)の勝五郎(8歳)という少年が、自分の前世は程久保村(日野市)の藤蔵という、6歳の時に疱瘡で亡くなった少年だったと語って大評判となった事件を題材としている。藤蔵も勝五郎も実在の人物であり、墓も残っている。文人大名池田冠山、国学者の平田篤胤など、多くの文人・学者たちがこのことを記録し、明治になると小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が随想集『仏の島の落穂』に記し、海外にも紹介された。生まれ変わりに興味のある人の中では、大変有名な話である。

郷土資料館では、平成18年に「勝五郎生まれ変わり物語探究調査団」を結成し、調査を委託した。勝五郎の生まれ変わりに関わる伝承・遺跡・資料などを蒐集・調査し、記録することを目的としている。現在35名の市民(市外の人8名)が参加し、毎月1回の例会のほか、資料調査や見学会を行なっている。メンバーの多くが、50歳代後半から70歳代である。市民ボランティアの協力を得るという展示はこれまでも行なってきたが、調査を委託する調査団を

まったく新規に立ち上げるのは、初めての経験である。試行錯誤で、なかなか軌道に乗せられなかったが、漸く2年が過ぎ、自主活動にも取り組めるところまで来た。昨年の11月には、池田冠山の国元である鳥取、八雲ゆかりの松江に資料調査に行き、予想外の成果をあげることが出来た。特別展は、探求調査団の成果発表の場でもあるので、いくつかのコーナーの展示を分担してもらっている。「生まれ変わり」という変わったテーマの展示であるが、興味本位のものではなく、資料に基づいて、当時の人々が何故人が生まれ変わるということにこんなに興味を持ったのか、行動や思考を検証してみたいと思っている。

子どもにも大人にも、見やすくわかりやすく、専門家にも、それなりの見ごたえのある展示をしたいという欲張った目標を立てている。たくさんの人の知恵を集めた展示が成功しているかどうか、是非確かめて下さい。

## 季節展『名勝小金井桜展』について

小金井市文化財センター 伊藤富治夫

小金井と言えば「桜」がシンボルです。かつて西の吉野山、東の小金井と言われ、日本を代表する山桜の名所でした。この桜は18世紀中頃、武蔵野の新田開発の時代に玉川上水の小金井橋を中心に兩岸約6mにわたって植えられた山桜の並木で、「金橋桜花」・「小金井桜」等と呼ばれ、大正13年（1924）には国の名勝に指定されました。およそ270年にわたって絶えることなく植え継がれてきましたが、時代の推移により往時の桜並木の景観は著しく衰え、今や存亡の危機にあります。このため当館では歴史の変遷を明らかにし、保護の一助とするため資料の収集や企画展示を行っています。

主な資料には、江戸・明治時代の文人・作家等が著した紀行文・地誌類が200編以上、詩歌（和歌・漢詩・俳句）も800首以上も含まれています。また歌川広重を代表とする錦絵や明治期の古写真・絵葉書等も多く、花見の文化史ばかりでなく、当時の景観を具体的に知ることができます。この他、地域に残る古文書や新聞記事等に桜樹の管理や花見風俗を伝える興味ある記事が見られ、武蔵野の郊外化の一側面をたどることもできます。また、明治末期から昭和初年に日本の史跡名勝天然記念物保存運動を啓蒙、推進した植物学者三好學の桜の研究論文等も重要な資料です。

2008年度は市制施行50周年にあたり、記念事業として『小金井市史資料編 小金井桜』の発刊を計画しており、現在、難解な史料の翻刻や解題の作成、編集作業に奮闘中です。この他、「50年の歩み写真展」とCD化、『郷土かるた』の発刊も予定されており、例年になく忙しくなりそうです。

当館では1994年度来、4月の花期に季節展『名勝小金井桜』を開催していますが、展示構成を毎年少しずつ変えてはいるものの、マンネリ化しつつあり、更なる展示の工夫やPRの必要性を感じているところです。



有馬誉純編『金井観花詩歌図巻』部分「小金井橋の景」  
(市指定有形文化財)

## くにたち郷土文化館～市民と共に～

くにたち郷土文化館 安齋順子

生涯学習の場である郷土文化館は、展示だけではなく、陶芸・和太鼓・古文書を読む会などのグループや、個人の文化活動を通して、「人との、人と人」が出会う場として幅広く利用されています。また体験教室などの事業には、市民や市民グループと郷土文化館が連携して行っているものが数多くあります。

郷土文化館と共に昔の暮らしや伝統を伝える活動を行っている市民グループのひとつが「くにたちの暮らしを記録する会」です。この会は時代とともに便利な道具が登場する一方で使われなくなり消えていく民具を残したいと、昭和54年に「国立市民具調査団」という名で発足し、古老から話を聞き、昔の生活や民具を調べる活動を行ってきました。そして今も郷土文化館と共に昔の暮らしや伝統を伝える活動を行っています。今年も会員の指導により、稲作体験教室「われら稲作人」や、「豆まき」「菱餅づくり」などの年中行事、「わらざうり作り」などの技術伝承の事業が行われます。

市内小学生を対象とした人気事業には「くにたち自然クラブ」があります。委託し実施しているのはNPO法人である「国立市動物調査会」です。郷土文化館のある国立市南部は、国立駅周辺の北部と比べ武蔵野の面影を残し、多くの自然が残っています。この環境を活かし、フィールドワー

クや夜間観察会などが行われています。

今年もさまざまな市民や市民グループと共に、多くの事業を展開して行きます。長年続けられてきた事業の中には、指導者の高齢化や、時代や環境の変化により事業の見直しを必要とするものもあり、これは今後の大切な課題です。



最後に展示についてですが、今年は夏季に、市民グループが長年にわたり作製してきた植物標本を用いて、国立の植物やその植生についての展示を行います。秋季企画展は、2006（平成18）年に惜しまれつつ世を去った陶芸家人間国宝の三浦小平二氏の作品を紹介します。

## 博物館職員が自作するオート解説

東大和市立郷土博物館 野崎洋子

当館にはプラネタリウムがあります。プラネタリウムで投影する番組は、その季節の星のさがし方や星座の紹介する星座解説が入っていますが、施設によっては職員が直接解説をする生解説の場合とあらかじめ音と映像をプログラムしてあるオート解説の場合があります。当館の場合は、職員全員でプラネタリウム投影を担当することから、誰でも投影ができるようにすべてオート（自動演出）で番組を構成しています。当たり前ですが、オート解説のために、録音した音や言葉は一度作成すると自動的に変わったりしません。一般投影番組は通常、季節ごとに入れ替えています。入れ替えをしない限り、ずっと同じ内容で星空を投影することになります。それが実際の空では、真夜中だったり、日の入り直後でまだ、星が見えない空であったりすることもあるのです。変えたくても業者から購入したものでは変えられませんし、差し替え分までの解説をつくる費用もありません。

そこで、当館では一般向けプラネタリウム番組の星座解説部分を、博物館職員で作成しています。職員の声をBGMとともにコンピューターに取り込んで編集ソフトを利用するのです。その日の空とまではいかないのですが、解説

する星空がその時期の宵空になるようにしています。これなら、星座の中を移動する惑星や新しい天文の話題も取り入れて解説することができます。この方法でプラネタリウムを投影するようになってからもう5年たちます。スタジオもなく、プロの声優さんのようにはいきませんが、実際に生解説で紹介する要領で取り込んだ声は、聞きやすいと好評です。途中には、観覧者に問かけけるような言葉も入れているため、生解説と錯覚されることもあります。番組投影期間途中で差し替えていくので、観覧者の中に気づかれる方もいますが、それはまた再来場につながっています。肉声ではないのに、生解説のように感じる不思議な感覚の解説です。

職員が話すということは、そういうことができる職員がいるということもPRする機会にもなります。その解説テープが蓄積すると、館の財産になります。プラネタリウムでなくても、いろいろな場面で解説をする機会はあると思いますが、しゃべっただけでは形に残りません。少ない職員で一度にできることは限られています。こんなふうに解説テープがあると役に立つこともあるのではないのでしょうか。

## 誕生！デジタルミュージアム

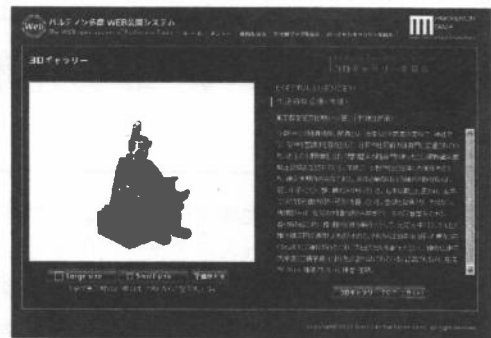
パルテノン多摩歴史ミュージアム 乾賢太郎

平成19年（2007）は、パルテノン多摩が開館して、ちょうど20年目を迎える年でした。当館では、開館20周年事業として様々な取り組みを行ない、博物館部門である歴史ミュージアムもいくつかの事業を企画しました。例えば、多摩村で活動した青年団の機関誌の復刻、『多摩丘陵の植物さんぽ道ガイドブック』の刊行、石仏調査団や定点撮影プロジェクトといったボランティアの発足などです。そして、忘れてはならないのは、デジタルミュージアムの誕生です。今回は、このデジタルミュージアムについて紹介したいと思います。

さて、現在多摩市内には歴史的に価値のある文化財が多く存在しています。また、パルテノン多摩には市民が中心となって集めてきた植物標本や、当館・多摩市教育委員会が収集してきた資料が保管されています。デジタルミュージアムは、このような文化財や資料の存在・魅力を広く伝えていくために作られたデータベースです。これらのデータは、デジタルミュージアムホームページ上（<http://www.parthenon-museum.jp>）で公開しており、様々な機能から文化財や資料に親しめるようになっています。

まず、「3Dギャラリーを見る」では、小野神社（多摩市一ノ宮）の隨身倚像や白山神社（同市落合）の獅子頭を360度自由な角度から見ることができます。

また、画像を拡大して細部まで閲覧できる「高精細ギャラリー」では、長さが約13メートルもある「調布玉川惣画図」（



弘化2年（1845）／多摩市教育委員会所蔵）を公開しており、他5点の資料も見ることができます。さらに、地図から文化財の位置が確認できる「文化財マップを見る」や資料データを検索できる「資料を見る」から調べることも可能です。

神社や博物館の収蔵庫に保管されていて、普段あまり目にするのがない文化財や資料ですが、その意味や歴史的な背景を知ることで、それぞれに価値があることがわかります。今後は、公開データも充実させていくことを計画していますので、多摩市の歴史・文化・自然を知るためのツールとして、多くの方々にデジタルミュージアムを活用していただければと思います。

## たてもの園開園15周年記念特別展「日本の建物」開催

江戸東京たてもの園 高橋 英久

平成20年3月28日（金）に、江戸東京たてもの園は開園15周年を迎えました。1993年（平成5）の開園以来、27棟の建物を移築・復元し、さらに来年度からはいよいよ3棟の新規建造物（万徳旅館、旧三島邸、土井邸）の復元が始まります。そして本年、開園15周年を記念して、平成20年3月から1年間を通して、「日本の建物」という全体テーマのもと、4部構成とし、さまざまな角度から日本建築の魅力を紹介する展覧会を開催します。

まず第一部は「木造建築の魅力」と題し、古来より森林資源が豊富であった日本において、さまざまな形で造られた木造建築にスポットを当てています。本展覧会では、日本建築における木造建築の歴史を確認しつつ、一方で現代の建築家による果敢な試みを紹介し、木



展示室 現代の章

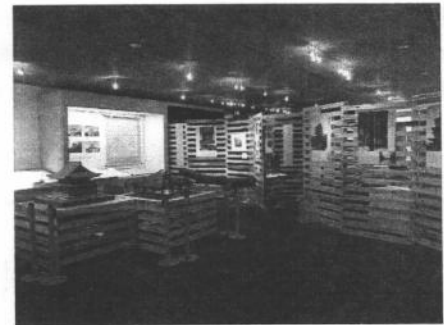
造建築がもつ無限の魅力に触れたいと思っています。

第二部は「建物と夏」展です。高温多湿の日本において夏を涼しく過ごす工夫は建物の造りに大きく関与しています。本展では夏を過ごすためになくはないものの、建築にみられる「涼」の工夫、さらに現代の暑さ対策に果敢に挑む試みなどを紹介します。

第三部は「日本の建築博物館」展です。日本では地域によって風土が異なり、建物の造り方も様々です。各地域では、たてもの園と同様、先人の知恵が活かされた古建築を保存するための博物館が存在します。本展では、日本各地の特色ある建築博物館と各館の収蔵資料を紹介し、またあわせて、各地の町並み保存の取り組みについても紹介します。

第四部は「建物のカケラ～木柁コレクションを中心に～」展です。建物は、時の流れの中でさまざまな理由により解体される事例が多々あります。一木氏は解体された建造物の部材を収集しているコレクターです。本展では氏のコレクションを中心とした「建物のカケラ」を展示し、失われた建物の記憶を共有したいと考えています。

また、本展覧会では、全国森林組合連合会・東京都森林組合連合会の後援を得て奥多摩の間伐材を活用し、展示仮設壁を作製しました。年間を通し、展示室内で木の質感と香りを楽しんでいただくとともに森に思いを巡らせていただきたいと考えています。



展示室内部

## たましん歴史・美術館の活動について

たましん歴史・美術館 中澤富士雄

財団法人たましん地域文化財団は、「たましん歴史・美術館」と分館として「御岳美術館」を運営しております。

たましん歴史・美術館はおもに多摩地域の作家の作品を展示し、御岳美術館は近代日本の洋画や彫刻を中心にさらに工芸品などを展示することでそれぞれの特色としておりますが、いずれも所蔵品を展示する施設として運営しておりますので、大きな特別展やイベントを行うわけではなく、話題性に乏しいきらいはありますが、そもそも多摩地域を代表する作家でありました倉田三郎画伯の「ヨーロッパでは小さな町にも美術館があり、市民の憩いの場になっている」というお話をうけて、地域の住民が気軽に立ち寄り、美術や歴史に親しめるような美術館でありたいと念願して開設にいたったもので、むしろ「話題性」とは対極にあるべき存在と考えております。ちなみに倉田画伯にはさまざまなご助言やご協力を賜り、当財団設立の際にご寄贈いただいた絵画は所蔵作品の核となっています。

御岳美術館は美術の教科書にみられるような作家の作品

もあり、それぞれ皆様に親しんでいただいておりますが、ここでは年3回「スケッチの日」を開催して皆様に楽しんでいただいております。当方の唯一のイベントといえるのがこの「スケッチの日」で、これもそもそも倉田三郎画伯の「スケッチこそが絵画制作の基本である」という信念に基づいて始めた催しであり、倉田画伯の誕生日である8月21日、開館記念日である11月3日、また天皇后両陛下の来館を仰ぎました4月11日の前後3日間開催しております。当初の理念はともかく、入館者のなかで希望者に画材を提供し、自由にスケッチを楽しんでいただくもので、当方もこの時期の入館者には積極的に勧誘しておりますので、それを楽しみにみえる方ばかりでなく、学校卒業以来はじめて絵筆を取るという方も少なくなく、皆様童心にかえって楽しんでいただけているようです。これも絵画教育に優れた業績を残された倉田画伯の教えの実践になろうかと考えております。

## 「縄文人に会いに行こう」

東京都埋蔵文化財センター 小葉一夫

東京都埋蔵文化財センターでは、多摩ニュータウン地域内で発掘調査された1,000箇所近い遺跡から出土した土器や石器の一部を「多摩を発掘する」のテーマで年間を通して展示しています。また、多摩地域では縄文時代の遺跡が多いこと、2万人の年間来館者の内、約3分の1が小学6年生の歴史の授業で見学に来ることなどから、縄文時代の展示を中心に企画展のテーマを設定しています。平成20年度のテーマは「縄文人に会いに行こう」で、天然素材の衣服を身に着けた縄文人が、お出迎えます。また、今回は東村山市の下宅部遺跡から出土した、漆の塗られた縄文時代の弓や編かごや、北区の西ヶ原貝塚で発見された縄文人骨なども合わせて展示しています。

展示の他には、体験コーナーとして、縄文土器の立体パズル、舞切り式による火起こし体験、縄文人の主食であったドングリなどの木の実をするつぶす体験なども取り揃えています。これらの縄文体験をとおして、当時の生活ぶりについて学んでもらえればと思っています。

また、昨年度から都内の小学校を対象とした「勾玉作り」や「火起こし体験」などの「出前授業」も試行的に始めました。勾玉作りは、比較的短時間で多くの人が体験できる常に人気のある事業ですが、今年度も中身をさらに充実さ

せて、実施学校数を増やしていきたいと考えています。

来年度の行事としては、恒例の縄文土器作りをはじめ、古代のカマドを作って実際に調理する「古代食体験」や縄文土器を使って猪鍋を作る「縄文食体験」、そして勾玉を作る縄文アクセサリー作りなどを準備しています。縄文時代の復原住居のある「遺跡庭園・縄文の村」と合わせて見学していただければと思っています。



## 最近の活動報告

集合住宅歴史館 木元理恵子

集合住宅歴史館は、UR都市機構 都市住宅技術研究所内にある施設の1つで、日本住宅公団時代に建設された団地の一部や、同潤会代官山アパートといった、歴史的に価値の高い集合住宅を移築・復元しています。

昭和30年代から高度経済成長期にかけて大量に建設されてきた団地は、当時憧れの的となり、申し込み倍率が100倍を越える団地もありました。昭和の象徴とも言われる団地ですが、最近、団地をテーマにした書籍やDVDが発売されたり、団地愛好家の方々による様々なイベントが開催されるなど、密かに注目を集めているようです。余裕を持たせた住棟の配置計画や、スターハウス（写真）のような当時の特徴的な住棟設計など、団地愛好家以外の多くの方にも改めて見直されています。以前から取材依頼の多い施設でしたが、そのような背景もあり、今年は雑誌からテレビまで様々なメディアに取り上げていただきました。中でもユニークだったものが、ラジオでの歴史館生中継です。団塊世代を対象としたラジオ番組の中で、リポーターが館内を見学しながら中継を行うというものでした。テレビや雑誌の取材は頻繁にあります、ラジオは初めての経験でした。実物を見ていない聴者の方にどこまで伝わるのか不安がありましたが、懐かしく、憧れだった当時の団地生活について、展示物の紹介を含め詳細に伝えていただきました。

しかし、やはり百聞は一見にしかず。是非一度足をお運びいただき、実際に目で見て触れて集合住宅の歴史をご覧いただきたいと思います。ここ集合住宅歴史館では、住宅の歴史だけでなく、生活の移り変わりや、浴室やトイレのような設備の変遷もご覧いただけます。また、5月には予約無しで自由に見学できる特別公開の開催も予定しております。今後も、より多くの方にご来館いただけるよう、さらに環境を整えてまいります。



人気のスターハウス



# みんなの知恵と力で甦れ！武蔵野の雑木林再生プロジェクト

多摩六都科学館 廣瀬 明子

多摩六都科学館（東京都西東京市芝久保町5）には最近ではめずらしくなった雑木林（1,950㎡）が併設されている。この雑木林は、当館の設立理念（科学・技術による緑と生活の調和）の象徴的展示として保存・管理されてきた。しかし、なかなか人の手が入りきらず主な構成木となるクヌギ、コナラは高木化、林床は日照不足となっている。こうした事態に、当館を支える多摩六都科学館ボランティア会の有志が『雑木林を再生しよう！武蔵野の自然をこの多摩六都科学館に甦らせよう！』の合言葉のもと、企業より助成金を得て「みんなの知恵と力で甦れ！武蔵野の雑木林再生プロジェクト」を立ち上げて平成19年10月より活動を開始している。

同プロジェクトで掲げる雑木林の再生活動は、今後十年、二十年、継続的に続いていく活動であり、そのための大切な足場固めが重要である。この一年は、ある意味雑木林の将来を占う大切な期間となる。雑木林を取り巻く生物環境を含めての再生には相応の時間が必要とされており、大人はもちろんのこと、将来の担い手である子どもたちもまた同時に関わっていくこと、二十年スパンで見た環境を支えるネットワークづくりが必須である。

## プロジェクトでの達成目標（5点）

- 達成目標① 本館併設の雑木林の存在意義の理解
- 達成目標② 定期的な手入れの実施
- 達成目標③ 林床の生物環境の調査及び改善
- 達成目標④ 来館者（親子）を対象にした雑木林での環境学習の実施
- 達成目標⑤ 武蔵野に生息する昆虫や鳥類の好む環境作り

花王・コミュニティミュージアム・プログラム2007実施計画書より掲載



雑木林教室風景より



# 東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩8分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	042-622-8939	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」からバス「市民会館」下車
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から健康センター行きバス「郷土の森」下車
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤野台団地行きバス「市立博物館前」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩12分
調布市郷土資料館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑1962	042-568-0634	JR八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車徒歩20分／コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩5分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行か藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環⑬「小金井公園入口」下車徒歩5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」からダイヤモンドシティ行きバス「八幡神社」下車徒歩2分／多摩モノレール「上北台駅」からちよこバス外回り「郷土博物館入口」下車徒歩2分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
東京農工大学科学博物館*	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩9分
江戸東京たてももの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西武バス「小金井公園西口」または関東バス「江戸東京たてももの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」下車徒歩20分
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
集合住宅歴史館（都市再生機構都市住宅技術研究所）	八王子市石川町2683-3	042-644-3571	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口下車徒歩18分／西武新宿線「田無駅」北口からはなバス「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車

\* 「東京農工大学工学部附属繊維博物館」は「東京農工大学科学博物館」と名称を変更いたしました。

## 編集後記

今号のミュージアム多摩29号においては特集記事を組みませんでした。過去の特集テーマを紐解き編集委員で頭を悩ませたものの、最終的に研修会報告と各館の活動報告という構成となりました。テーマを検討しますと博物館における課題が浮かび上がるものの、特集を組むには先を行き過ぎていたり、過去に取り上げていたり…。しかしながら、各館の活動報告では、検討の際にあがっていたテーマを寄せていただいた館もあり、今後掘り下げて伺ってみたいと思うところです。

特集ではありませんが、平成20年度より国立ハンセン病資料館が三多摩公立博物館協議会に加盟されることとなりました。その紹介を巻頭にあげさせていただきました。見学会に昨年参加いたしました。館の成立、活動を含め大変興味深い内容でありました。

最後に、今号の発行にご協力いただきましたみなさま、ありがとうございました。

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩 No. 29

発行日 2008年3月31日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会  
2007年度会長 町田市立博物館  
東京都町田市本町田3562

編集委員 町田市立博物館 畠山豊  
東京都埋蔵文化財センター 小葉一夫  
江戸東京たてもの園 高橋英久  
集合住宅歴史館 大木真理子